

庭の花々

水仙は去年の小叢の同じ位置



水仙

牡丹の芽 風に乱れぬ高さ哉

ぼうたん

あめもよ

牡丹を妻の案じて雨催い

ぼうたん

牡丹の柔し花芽の舞い姿



牡丹

牡丹の芽 老夫婦の声日々聴きて
椅子寄せて牡丹の新芽守りけり

牡丹園 庭椅子二つ並べあり

我が庭の牡丹に向かう椅子二つ

ぼうたん
牡丹の紅色土に還りたり

牡丹散り大地再び冷ゆるかな

ぼうたん
牡丹の女装を解きて横たへり

ぼうたん ほのおほく
牡丹の焰解れて地に還る

ぼうたん やえはたえ
牡丹の脱ぎし衣の八重二十重

五年振り咲きし牡丹の巨大なり

今朝開く牡丹俄かに艶姿 あて

咲きつも崩る氣配の牡丹かな

身に余る花卉の重さ牡丹落つ

命萌ゆ も 芍薬の芽の真昼かな しゃくやく

芍薬の業火解れて地へ還る はぐ かえ



芍薬



芍薬の茎の細さに花重し

茎細く大芍薬の傾きぬ

芍薬の崩れて大地淫らなり

芍薬の冷たき花卉拾いけり

沈丁花 香りに咽^{むせ}て花終わる

沈丁花散り落ちる頃 陽差し濃し



沈丁花

星屑となりて散り敷く沈丁花

沈丁の花の終わりの香の咽^{むせ}る

アマリリス 顔背^{そむ}け合い二輪咲く
二重唱聴こえ アマリリス振り返る
蛇莓^{はみな} 儂^{はみな}き花や蛇を待つ

春浅きタラの木の棘^{とげ} 柔らかき

山独活^{うどく}の若芽^{わがめ}を避^よけて草を刈る

独活^{うどく}の株 移し終^とへれば爪割れる

桜蘭小^{せう}さき花片 弾^{はじ}け合う

芥子^{けし}の花 か細く揺れて毒含む

なでしこのひとかたまりに光満ち

コスモスの同じところに吹き揺れる

コスモスの色に触れつつ風の道

寄る風に色ある如し秋桜

紫陽花^{あじさい}の日々に膨^{ふく}らみ時^{とき}おそし



紫陽花

雨しだき 紫陽花栄華 地に垂れる

そ ば え

庭覆う紫陽花色の日照雨かな

庭の子等帰りて 雨の花手鞠

て ま り

ドクダミの白き小さき花輪舞



どくだみの花のひかりの吹き溜まり

じゅうやく

十薬の群れて小さき家守る

十薬を飲んで難^た無し^ま老い二人
十薬や風の重さの溜まり場所
暮れ残る十薬の花 愁思かな
花白くドクダミの名を給^{たま}わりし
十薬の花あるところ暮れ初めし

孤高なる赤さを恥じて曼殊沙華



曼殊沙華

向日葵^{ひまわり}の前世の記憶今年又
向日葵の寂しき高さ咲きほこる
庭の椅子ミントの香る場所に有り



鉄線

テッセンの折れるばかりの茎堅し

山桃を食えば幼き日の記憶

山桃を踏んで巨木を仰ぎ見る

返り梅雨 あざみ ドイツ薊の花怒る

梅雨明けのアンティチヨークの茎くき太る

紫蘇しその香の残る小指で鼻穿る ほじ

穹へ おおぞら 蒲公英たんぽぽの絮吹いている わた

芝桜ひかり湧き出ず小道かな



芝桜

白粉花おしろいの黒き実の飛ぶ夕べかな

おしろい　こぞ

白粉花は去年と違わぬ樹の下に

白粉花おしろいの夕べとなりて水を打つ



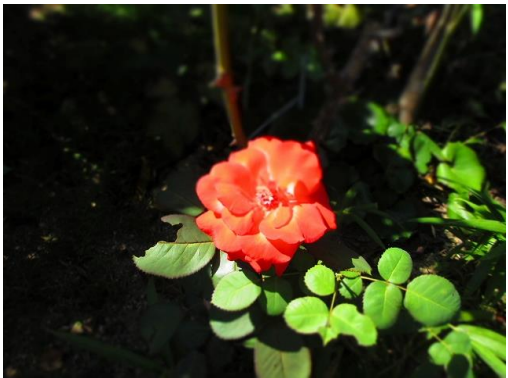
白粉花

薔薇一輪オフィリアという名の運命さだめして

何恨うらむはかなき棘とげや薔薇猛る

冬薔薇の咲いて小庭ねくの温みかな

春愁の一本の薔薇剪りにけり



風に散り 木香薔薇の黄絨毯

窓覆う蔓薔薇の葉の真青なり



モッコウ薔薇



花終わり今年の吾の歳終わる

凌霄花毒ある貌と思わざる

朝靄に花大根のひかり満つ

逆光に踊るいのちの花大根

千日紅揺すり終まる風の色

野牡丹の花の高さや青き空

鬼灯に夕下風の触れてゆく

ほおずき

鬼灯の色々な赤彩づけり

いろ

鶏頭を指で揺らせば揺れ止まず
鶏頭の重き終わりを引き抜きぬ



鶏頭

鶏頭を抜き取る束の手に重し

草の中今年こぞの貝母ばいもの新芽あり

俯うつむきて空を見ずして貝母ばいも咲く

人の顔見ずに貝母ばいもの花終わる



貝母（編笠百合）

首垂れて編笠百合のうすみどり

凌霄のうぜんの毒に酔いたき蟻子来る

百年の朽木こけにいのち苔の花

馬酔木あしび咲く万の釣鐘音もせず

梔子くちなしの朝の白さの汚れ無き

梔子くちなしの花や白磁の艶もてり

百年の朽木こけにいのち苔の花

馬酔木あしび咲く万の釣鐘音もせず

花薮にらは揺れつも陽に向いており

初物の殊更苦き露の臺

考える螢袋の真昼かな

夕風に螢袋の灯りけり



螢袋

庭の隅 薄紫の萩明かり

枯れ萩を掃えば^{はら}辺り寒に入る

六十路過ぐ吾に優しき雪の下

遠き日の贖罪灯^{とも}す浮吊木^{うきつり}

凌霄の毒に酔いたき蟻子来る^{のうぜん}

百年の朽木にいのち苔^{こけ}の花

馬酔木^{あしび}咲く万の釣鐘音もせず